国宝 一字蓮台法華経(普賢勸発品)部分 紙本著色 平安時代後期 25.9×329.0㎝

大和文華館蒐集ものがたり8

一字蓮台法華経

大和文華館々長 矢代幸雄

横浜の旧原三渓翁のコレクションの名品の数々が、我が大和文華館の所蔵に帰したという幸いな因縁については、私は以前にも述べたことがありましたが、今回は、その中でも特に目立った日本の装飾経の名品、一字蓮台法華経について、お話しを致しましょう。

読者の中には、昨年の春、当館が開催した「装飾経展」を御覧になって、日本美の極限とも思われるような、あの経巻類の美しさを、忘れかねた方々も、多数あったことと思われますが、私も実はその一人で、中でも、この一字蓮台法華経が、扇面古写経、法華経冊子、平家納経、久能寺経、慈光寺経、等々の名品群と共に一堂に会して、その美を競い合ったあの展覧会当時の壮観を、私は今も時々思い出すのであります。

本巻、即ち一字蓮台法華経が、かつては一品一巻として二十八巻揃って製作され、そしてそれに相応した、恐らくは藤原蒔絵の経筥に、貴重に収められていた本来の有様を、楽しく想像するのでありますが、現在は、最後の巻、即ちこの第二十八の普賢菩薩勸発品が遺存するを知るのみで、その他の巻がすべて失われていることは、何としても、残念でしようがありません。

この経巻を開いた見返絵は、打曇りの料紙に、金銀箔の霰、ちぎり箔野毛、砂子等々を散らし、濃厚なる岩絵具の彩色を施し、最も本格的なる大和絵様式を以って、仏間の内に、個性的描写になる僧侶、貴公子達の法華経読誦の光景が、写実的に描かれてあります。見返絵に続く経文の部分は、同じく金銀彩色打曇りのある料紙に、銀罫を引き、普賢勸発品の経文が、一字づつ金輪に囲まれて、彩色の蓮台の上に書かれてあります。一行十二字詰で、蓮台は色とりどりに彩色され、五行目毎に、その行すべての蓮台には、銀泥が点じられてあります。

装飾経遺品として、これは最高の芸術性を誇る甚だ艶美なる荘厳経の一つで、その製作年代も、平家納経とほゞ同じ平安朝末期であったろうと考えられます。

この様に豪奢に飾られた装飾経を見ますと、仏陀の教えを記録した仏教教典である経巻が、なに故に、この時代に於て、かくも美しく飾られるようになったか、多少不思議に思われますが、しかし当時の社会情勢に思いをはせてみますと、一概に理解され得ないものでもありません。この時代には、何人も免がれ得ないような病気にかかったり、死期が近づいたりすれば、仏の慈悲を頼って加持祈禱してもらうより、仕方がなく、大して医療も無い時代であっただけに、人々はあっけなく死んで行って、北邙一片の煙に立ちのぼるということになったのでありましょう源氏物語などを読んでみても、いかに速かに人々が死んで行ったかが、あまりによく察せられて、不思議なようです。彼等の生涯を考えてみると、全く無常迅速の儚ない限りのような気がしますが、これを裏返してみますと、あまりにやる瀬ない感傷と、そういう儚ない人生を、せめて美しく飾ろうとする美的生活への欣求とが、王朝貴族達の心のうちに、その頃盛んになりつつあった法華経信仰の動機となって、浄土思想を切実に発達させて行った様です。従って、これらのあわれむべき人々の憧れた仏土は、美の天国でなければならず、そこに君臨して憐れなる人間の魂を救ってくれる弥陀も、観音勢至も、「美男におはす」みほとけでなければならなかったわけであります。そして経巻をかくも豪華で情趣にあふれたものに美化し、巻を巻き留める平打紐や、その末端に付けられた露と呼ばれる蓮華型の銀製鍍金の小金具に至るまで、清浄にかつ高貴に、作らずにはいられなかった、という可憐なる心遣いとなって現われる以外はなかったのでありましょう。大事の大事のみほとけに、よい加減のものは献じられない、という彼等の真率なる信仰と愛の告白とを経巻の製作が端的に物語っているとも、言い得るのです。現代人から見ますと、不思議な程に美の論理に滲透された信仰であって、それなればこそ、この様にすべての美を集中させたような芸術の至宝が、彼らの真心から生まれ出たので、ありましょう。

季刊 美のたより No.12
昭和44年12月1日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.